

路線価でひもとく街の歴史

第6回 「石川県金沢市」

郊外の新都心と旧城下町の町並み

金沢は、前田利家公を藩祖とする加賀百万石の城下町。明治に入ってなお京都、名古屋に次ぐ5位の人口規模を保った。加賀友禅や金箔など伝統工芸が盛んで、その経済力を背景に独自の町衆文化が発展。ひがし、にし、主計町の3つの茶屋街が伝統を今に伝えている。金沢は戦災を免れたため、城下町の痕跡がここのかしこに残る。武家屋敷や町屋は言うまでもなく、伝統的な町割りもよく残っている。図1は金沢市の中心街である。昭和30年代の地図と見比べ、当時は存在しなかった道は破線で示した。城下町の直線的なグリッドの中で、曲線を描いた道はだいたい堀の跡である。金沢城を囲む「お堀通り」は名前の通り外堀だ。さらに外側に城をぐるりと囲む2本の道が走っている。これは堀と土居からなる防御施設「惣構そうがまえ」の痕跡である。所々で当時の遺構が整備されており、復元された水路や升形を眺めながら城下町を一周するのもおもしろい。

図1 金沢市中心街



片町と武蔵ヶ辻

昭和35年(1960)、金沢市の最高路線価の所在地は「片町えり虎呉服店前電車通」だった。金沢の商業地は北国街道沿いに展開した。片町は犀川を渡ったところから香林坊の手前まで。わが国で初めて商業組合が組織された屈指の商店街でもある。えり虎呉服店は、当時「電車通」と呼ばれていた北国街道と、片町と同じく中心街を構成する商店街のたてまち縦町通りが合流する地点(図中1)にある。ここで電車とは北陸鉄道金沢市内線で、昭和42年(1967年)

に廃止されるまで、片町を通り、香林坊、武蔵ヶ辻を経て金沢駅に至るメインストリートを往来していた。

その後、最高路線価の目印が「大和百貨店」、次いで「一の谷カバン店」に、通りの名前が市内電車の廃止に伴い電車通から「片町通り」に変わったが所在地自体は平成に至るまで変わっていない。大和百貨店はえり虎呉服店の3軒隣(図中2)にあった。金沢初の百貨店で、大正12年(1923年)に当地で開店。当初は宮市百貨店と称していた。一の谷カバン店はえり虎呉服店と大和百貨店の間にあった。

片町に次ぐ第2の商業拠点が「武蔵ヶ辻」で、オフィス街を挟んで向こう側、北国街道の曲がり角にある。そのシンボルは享保期以来約300年の歴史を持つ金沢市民の台所、「近江町市場おうみちよういちば」だ(図中3)。地魚や

図2 広域図



加賀野菜を中心に約180の店が軒を連ね、観光客も大勢訪れる。現在は複合商業施設「かなざわはこまち」の場所（図中4）には昭和5年（1930）に三越が出店。後に地元資本の丸越百貨店となる。昭和48年（1973）、近江町市場の対面（図中5）に市の再開発事業で当時市内で最も高い18階建の「金沢スカイビル」ができた。低層棟には丸越百貨店が移転し「名鉄丸越」となった（現在は「めいてつ・エムザ」）。

武蔵ヶ辻の再開発が一段落すると、片町に隣接する香林坊エリアの再開発が始まった。昭和60年（1985）、香林坊109が完成（図中6、現在の東急スクエア）。翌年、その向かい側に完成した香林坊アトリオに大和百貨店が本店を移した（図中7）。その約10年後の平成7年（1995）年には片町に代わり「香林坊大和前百万石通り」が最高路線価地点になった。

郊外の新都心と旧城下町の町並み

金沢駅の開業は明治31年（1898）。片町から2kmほど離れ、城下町のまさに外縁に置かれた。急速な発展の背景に北陸新幹線の延伸計画があった。新幹線の整備とともに再開発が進み、高層ホテルや大型店が集積。延伸開業を5年先に控えた平成22年（2010）には最高路線価が「金沢駅東広場通り」に移った。

駅の反対側は長らく閑散としていた。駅の「西口」ができたのは昭和60年（1985）。駅西から金沢港に向けて幅50mの直線道路が敷設され、これを新たな都市軸に新都心の開発が進められた。旧城下町にあった業務機能が徐々に移っている。石川県庁は平成15年

（2003）に移転。地元地銀の本店、NHKも駅西口に移った。明治42年（1909）の進出以来110年以上も香林坊に店を構える日銀も移転する予定だ。バイパス道路に連なるエリアに機能性が高い新たな中心市街地ができた。

他方、旧城下町からは元々あった拠点機能が郊外に続々移転。跡地は街の魅力を高める公共施設になった。金沢城内にあった金沢大学丸の内キャン

パスが平成7年（1995）に郊外移転。跡地は県が買い取って城址公園にした。史実に基づき菱櫓・橋爪門・橋爪門続櫓・五十間長屋などの城郭建物を再建。外堀の一部や内堀を復元した。玉泉院丸庭園では色紙短冊積のような芸術性の高い石垣群を眺められるようになった。平成20年（2008）には金沢城跡が国の史跡に指定された。新都心に移転した県庁も以前は金沢城の縄張内にあったが、大正13年（1924年）竣工の旧庁舎は保存され「しいのき迎賓館」となった。その向かい側には現代アートの展示で異彩を放つ金沢21世紀美術館があるが、ここは元々金沢大学附属中学校・小学校・幼稚園があった場所だ。

こうして旧城下町は屋敷町、職人の町だったかつての町並みに立ち返り、歴史的な佇まいを深めている。金沢の場合、惣構の遺構、武家屋敷と町屋、茶屋街が金沢城を中心に面的につながり、国内外から人を集める観光都市としての価値も高まった。金沢城公園の復元は着々と進み、この7月には尾山神社側に鼠多門、鼠多門橋が完成。今後、儀礼や政務を行った二の丸御殿の再建に向け調査検討を進める予定だ。平成30年の金沢城公園の入園者数は217万人とこの10年で倍増した。着々と進む復元事業、その他のまちづくり施策が新幹線の開通と相乗効果を生み出している。

プロフィール

大和エネルギー・インフラ 投資事業第三部副部長
鈴木 文彦

仙台市出身、1993年七十七銀行入行。東北財務局上席専門調査員（2004-06年）出向等を経て2008年から大和総研。2018年から現所属に出向中

